

康診断にて左肺門部の異常陰影を指摘され受診。触診上肝、脾、表在リンパ節は何れも触知せず。正面断層にて背面より6cmの位置を中心に辺縁や、不整な腫瘤陰影を認め、気管支造影ではB₆起始部において閉塞像を認める。術中所見で腫瘤は鶏卵大、S₆の大部分を占め葉間肋膜を越えて上葉に浸潤しており、凍結切片組織診では小細胞性未分化癌の疑いで確定診断がつかず、左肺摘除術並びにリンパ郭清を行なった。術後の病理学的検索により malignant lymphoma, lymphocytic type, poorly differentiated (by/Rappaport) と診断された。本症例は文献上本邦10例目にあたると思われる。

5. 興味ある経過を呈した肺癌肉腫の一症例

長崎大学第1外科

高木正剛, 川崎正名, 永野信吉
川原克信, 綾部公認, 武富勝郎
柴田紘一郎, 辻 泰邦

同 第2内科

奥野一裕, 籠手田恒敏
森 信興, 斎藤 厚, 原 耕平
宮崎医科大学第2外科

富田正雄

我々は約3年前より外来にて follow up 中であった右中肺野の空洞性変化部に発育した carcinosarcoma の一症例を経験したので若干の病理学的考察をこれに加え報告した。

6. 15才少女に見られた Muco-epidermoid tumor の1例

長崎大学第2内科

植田保子, 冬野誠三, 雨森博政
中塚重和, 籠手田恒敏
松本武典, 奥野一裕, 原 耕平

同 第一外科

柴田紘一郎, 富田正雄
症例は15才女子高校生。過去3回にわたる血痰及び咯血を認

めて来院。胸写上、右肺透過性亢進を示し、右主幹の追跡が不可能であった。気管支鏡では、分葉化した腫瘤にて右主幹は完全に閉塞していた。気管支動脈造影では同部に一致して濃染像を認めたが、悪性像はなかった。手術を行い、組織学的に、Muco-epidermoid tumor であった。

7. 喀痰細胞診による職場検診

国立長崎中央病院 内科

箴島正之
同 検査科 丹野ちづ子

肺門部早期癌発見の基礎調査として、昭和48年度より3年間、ハイ・リスク・グループの多い職場で、喀痰細胞診による集団検診を試行し、呼吸器症状・喫煙量も調査した。

成績：長崎県庁の40才以上の職員 893名を対象とした。受診率は約75%、男性が97%。40・50才台が殆んどであった。

喫煙者は70~75%、喫煙指数400以上の重喫煙者は40~50%であった。

咳・痰・血痰の有症状率は、夫々約20%、30%、2%であった。

細胞診の成績は、鏡検で、喀痰と認められたものが50~55%で、喀痰細胞診による集検の有用性が確められた。

8. 当院に於ける気管支ファイバースコープの使用経験

長崎市立市民病院第2内科

林 敏明, 今村由起夫
栗山一孝, 中塚重和, 森 巖
木下 勇, 井上 晃, 中野正心
昭和49年12月より昭和51年5月迄に施行した、胸部疾患166例の内、生検、手術、剖検にて、確認した原発性肺癌29例に検討を加えた。尚当院では気管支鏡施行にあたっては全例を、16mm映画と写真に記録した。気管支

鏡所見の内訳は直接所見65%、間接所見14%、無所見21%で、扁平上皮癌、未分化癌の多くは直接所見であった。気管支鏡確診率では擦過細胞診81%、生検82%であり両者を組合せると、92%と高率であった。無所見6例(腺癌6例)の確診率は100%であり、未梢型肺癌にも気管支ファイバースコープの有用性を認めた。

9. 最近経験した大細胞型未分化癌のレ線学的考察

熊本大学第一内科

西川 博, 畑本和子, 青野宏昇
尾崎輝久, 福田安嗣, 志摩 清,
徳臣晴比古

大細胞型未分化癌はその辺縁は鮮明なものが多いが、症例1のように閉塞性肺炎を起し一部不鮮明になるものもある。又症例3のように粗大 notch を示すものも多く約半数あると言われる。気管支造影では尖型閉塞所見も多いが、腺癌と異なり、病巣周辺気管支は強度に圧排偏位されているのが特徴所見である。又大細胞未分化癌は種々の組織型の方向へ分化潜能を有していると言われていた性格上低分化腺癌、低分化扁平上皮癌と類似のレ線所見を呈する場合もあることが推察され、ここにレ線による病理組織診断の限界が感じられる。

10. 当病院における原発性肺癌の臨床的解析

長崎市民病院第2内科

今村由紀夫, 林 敏明
栗山一孝, 森 巖, 北村 喬
木下 勇, 井上 晃, 中野正心
最近2年間、当院で経験した原発性肺癌32例について臨床的解析を行なった。

対象は手術、剖検、生検で確認した32例であった。性別は男